


 書評

臺 弘 著

誰が風を見たか 増補版

ある精神科医の生涯

加藤進昌

本書は、臺弘先生(1913-2014)が満 80 歳に刊行された自伝の復刻版に、先生自身のその後の発表論文の中から 2 編、そして私生活の一面を物語る「大正の子供の物語」と、ご長女(坂本史子氏)による「松沢幼ものがたり」を収載した増補版である。内容の詳細については、増補部分にある齋藤治氏のいわば「巻頭文」が簡にして要を得ている。80 年の歩みを記録された初版本は、時代を超えて読み継がれる内容を備えていたことはもちろんである。しかし、先生はその後さらに 20 年を亡くなられる直前まで活躍され、一方で初版本はすでに絶版となっており、入手不可能となっていた。この増補版によって、初めて臺先生の百年と過去一世紀の精神医学史が結びつき、完成したように思う。

臺先生は 2014 年 4 月 16 日満百歳でその生涯を閉じられた。先生の突然の旅立ちに私たちは全く心の準備ができていなかった。これは百歳という超高齢者の場合には異例なことと言わざるを得ない。ご自宅の近くで営まれた葬儀のあと、急なことで知らせが届かなかった方々のためにも、せめて一周忌をと私は思い、ご長女やお弟子さんらと相談を重ねた。たまたま別件で訪問された星和書店の石澤雄司社長にも、自伝のことをお尋ねした。初版本は活版印刷だったので新たに作らねばならないとのことであったが、増補版刊行を快諾していただいた。では、自伝をあくまでも尊重するとして何を補うか。先生の業績を知悉している人たち、本文にある「ウテナ・スクール」の面々の意見で論文が厳選された。ご遺族の協力で写真も追加すること

ができ、増補版の経緯はご長女の「ものがたり」に掲載されて、本書は一周忌の思いをこめて完成した。

臺先生の東大時代は今からふりかえれば、なんと人生の折り返し点の頃になる。当時は世界中で学生運動が巻き起こり、中国では紅衛兵運動の嵐が吹き荒れた。精神科では反精神医学がブームとなり、統合失調症は社会がつくる病にされてしまった。その中で臺先生はまさに渦中の人だった。にもかかわらず自伝での先生の記述は実に淡々としている。その批判は、同時代を一部だけでも共有した私から見ても、全く直截的で偽りが無い。実に透明である。とても私には書けない。臺先生をして初めて可能なことというほかはない。足かけ 6 年に及ぶ過酷な戦争体験の記述から分かるように、臺先生にとってはあの騒ぎは戦争ごっこに過ぎなかったということかもしれない。

本稿は、第三者が客観的な批評をするという一般的な書評の原則から逸脱している。編集者からあえて私に依頼が来たということは、それも承知でこの増補版刊行の経緯を明らかにすることを期待されてのことと、私は勝手に解釈した。本書をもって、読者は臺先生の透徹した観察眼を通して、この百年の精神医学・精神医療の歩みを共同体験できることを、ひいきの引き落としという批判も覚悟の上で強調したい。

(昭和大学発達障害医療研究所)

●四六版 480 頁 2015 定価：本体 3,800+税
星和書店刊